

ルソーの作品における 女性の犠牲について

前之園 春 奈

はじめに

ジャン＝ジャック・ルソー（1712-1778）は1754年6月に祖国ジュネーヴへの帰還をはたした。彼はそこで新教に再改宗し市民権を回復した。ジュネーヴには4か月滞在し、ルソーはその間いくつかの作品の構想を練った。そのなかのひとつが『ルクレティアの死』である。ローマの貴族コラティニウスの妻ルクレティアは、夫の留守中に王の息子セクストゥスに強姦される。彼女は夫と父親を呼び寄せこの出来事を語り、彼らに復讐を願うと短剣で胸を突いて自殺したという。この逸話をルソーは散文悲劇に仕立てようと考えた。この作品は完成には至らず草稿の断片のみが残されている。しかしルソーは、その後もルクレティアのように理不尽な理由で事件に巻き込まれ犠牲となる女性の物語を繰り返し書いている。ルクレティアの死後、人々が蜂起して王を追放しローマが共和国として再生したように、それらの作品においても、女性の犠牲が契機となり共同体が再生されている。そこで、本稿では『ルクレティアの死』を、そのバリエーションとなっている作品を参照しつつ精読し、ルソーの共同体再生の物語には常に犠牲となる女性が登場していることを明らかにする。

『ルクレティアの死』が書かれるまで

ルソーが『ルクレティアの死』の制作を思いついた背景には、彼がもとから抱いていたローマへの憧れと、ジュネーヴの市民権の回復があったと考えられる。このふたつが合わさりルソーの共和制への思いを熱くさせたのではないだろうか。

ルソーのローマへの情熱は幼少期に芽生えたもので、それには彼の読書体験が大きく影響している。『告白』によると、生まれてすぐに母親を亡くしたルソーは、幼少期は時計職人であった父親と一緒に母や母方の祖父の残した蔵書を読んで過ごした。読んだ本は『アストレ』のような恋愛小説、ル・シュウールの『教会と帝国の歴史』、ボシュエの『世界史論』、プルタルコス『偉人伝』、オヴィディウスの『変身物語』、ラ・ブリュイエールやフォントネル、モリエールなど多岐にわたった。当時のジュネーヴの職人たちはよく本を読んでいたので、『人間不平等起源論』の「ジュネーヴ共和国への献辞」の中でも父親の仕事場には道具に交じってタキトゥス、プルタルコス、グロチウスの本があったことが書かれている。¹⁾ 当時を振り返りルソーは次のように書いている。「たえずローマ・アテナイのことを考え、いわばそういう都市の偉人たちとともに生きていたので、しかもわたし自身が共和国の市民として生まれ、祖国愛を最も強い情熱としていた父の子であったために、わたしもまたそれにならって祖国愛に燃えていた。」²⁾ また、ジュネーヴに戻った時の心境は次のように書かれている。「そもそもわたしがジュネーヴへやって来たのは、共和熱にひかれてだが、そこに着くと、たちまちそのとりこになってしまった。この共和熱は、ここでうけた歓迎によってさらに高まった。いたるところで歓迎され、ちやほやされたので、わたしはすっかり愛國熱に浮かされてしまった。そして祖先とは異なった宗教を奉じているために、この国の公民権を得られないのが恥ずかしくなって、公然と祖先の宗教にもどろうと決心した。」³⁾

1754年は、ルソーにとって祖国の宗教への再改宗という大きな出来事が

あった年となるが、『人間不平等起源論』が完成されたのもこの年であることにも注意すべきだろう。

そもそも無名であったルソーが論壇で名を知られるようになったのはディジョンのアカデミーの懸賞論文に応募した『学問芸術論』（1750）が当選してからである。そして、同アカデミーが1753年に出題した「人間の不平等の起源はいかなるものであるか、またその不平等は自然法によって是認されるか」という課題は、まさにルソーが関心を持って思索をめぐらせていた問題であった。ルソーは早速論文執筆に取りかかり、翌年の1754年4月に『人間不平等起源論』を書き上げた。この論文はコンクールには落選した。しかし、アカデミーの懸賞課題を読んだことが、ルソーが本格的に自然・文明・社会について独自の思想を展開していくための発想の起点となったと言うことはできるだろう。

市民権の回復は彼の政治的著作の共和主義的な傾向を方向づけることにもなった。ジュネーヴ滞在中、ルソーは『政治制度論』の構想も練っていた。出版には至らなかったものの、そのアイデアは『政治経済論』（1758）や『社会契約論』（1762）に活かされている。『人間不平等起源論』、『政治経済論』、『社会契約論』を並べると、彼の思考の流れを追うことができる。

『人間不平等起源論』に添えられた「ジュネーヴ共和国への献辞」の中でルソーは次のように書いている。「私は共和国の他の半分の幸福を作り出し、優しさと賢さとで、国の平和と良俗とを維持しているあの大切な半分のことを忘れてなりませうか。愛らしくしとやかな女性市民たちよ、あなた方女性の天職は、常にわれわれ男性を制御することでありませう。夫婦の結合においてのみ行使されるあなた方の純潔な権力が、ただ国家の栄光と公共の幸福のためにのみ感じられるときはまことに幸いです！」⁴⁾ここでルソーが「女性市民 *citoyenne*」という言葉を使って呼びかけ、女性の役割について語っているのは興味深い。なぜなら『社会契約論』でルソーは市民 *citoyen* について語っているが、女性市民についての言及箇所は見当たらないのである。『人間不平等起源論』のこの「献辞」はジュネーヴ

に向かう途中で準備されたと考えられている。この時期にルソーが女性を主人公とした作品を書こうと思いついたということは十分考えられる。ローマに憧れ、タキトゥスの翻訳も試みていたルソーの頭にルクレティアの名前が浮かんでもおかしくはない。悲劇的な死をとげた女性、その死によってローマに共和制を樹立させたと言われているルクレティアは新しい作品の主人公にふさわしく感じられたのではないだろうか。しかしこのテーマは当時流行らないものであったらしくルソー自身「この悲運の女性ももうフランスのどこの舞台にも見られない」と書いている。プレイアード版ルソー全集の注には、18世紀のフランスではルクレティアを主題にした劇作品はこの『ルクレティアの死』を除いては残されていないと記されている。⁵⁾ それでもルソーは「これをあえて登場させても、皮肉屋連中を感心させる自信があった」と述べていることから作品のテーマに価値を見出していたことがわかる。⁶⁾

『ルクレティアの死』

『ルクレティアの死』はティトゥス・リウィウスの『ローマ建国史』にある「ルクレティアの凌辱」のエピソードを下敷きとして書かれている。その他にルソーの愛読書であるプルタルコスの『英雄伝』や、マキアヴェリの『ディスコルシ』も参照されていると思われる。ここではまずリウィウスの『ローマ建国史』の第1巻、第57・58章に沿って「ルクレティアの凌辱」といわれているエピソードを見てみることにする。

ルキウス・タルクィニウス・スペルプスが王の時代、ローマはルトゥリ人の町アルデアを包囲した。その陣中で宴会が催され、妻の自慢大会が始まった。タルクィニウス・コラティニウスは自分の妻が一番だと主張し、これから皆でローマに戻り妻たちが何をしているか見に行こうと提案する。そこで一同がローマに帰ると、妻たちは夫の留守をいいことに贅沢三昧な食事や遊びに興じていた。ただひとりコラティニウスの妻ルクレティ

アだけが侍女たちと糸を紡いで働いていた。この時、王の息子であるセクストゥス・タルキニウスは美しく貞淑なルクレティアに目を奪われ彼女に対する邪な感情を抱く。数日後、セクストゥスは、コラティニウスの留守をねらってルクレティアの屋敷を訪ね、丁寧に迎え入れられた。夜になるとセクストゥスはルクレティアの寝室に忍び込む。剣を突きつけられても抵抗を続けるルクレティアに、セクストゥスは言うことをきかなければ彼女を殺し裸の奴隷の死体と並べて姦通中に殺されたようにすると脅す。名誉を汚されることには耐えられずルクレティアは脅しに屈してしまう。セクストゥスが去ると、彼女は父と夫に使いを出し、信頼できる友をひとり伴ってただちに来るように伝える。父はプブリウス・ファレリウスを、夫はルキウス・ブルトゥスを連れて到着すると、彼女は彼らに何が起きたか打ち明ける。話を終えると彼らに復讐を誓わせ、短剣で胸を刺して自害する。⁷⁾

続く第59・60章では革命と王の追放が語られている。コラティニウスの友人であるブルトゥスはルクレティアの胸から短剣を抜き取ると、それを掲げてタルキニウス家打倒を誓う。父ルクレティウスと夫コラティニウスもそれに続いて誓いを立てる。彼らがルクレティアの遺体を広場に運ぶと人々が集まった。事件を知った人々は怒り蜂起して、ついに王の一族は追放される。ローマの人々は王政から解放され、執政官にはブルトゥスとコラティニウスが選ばれた。

このように、ルクレティアの物語はローマ共和制誕生の物語でもある。

ルソーは通説になっているルクレティアの物語を少し変えている。

『ルクレティアの死』では、ルクレティアとセクストゥスがかつて婚約していたということになっている。ルクレティアの侍女の台詞がそのことを示している。「ローマの人々はあなたの最初の結婚話に拍手喝采しました。民衆の全ての願いが、そしてタルキニウスの選択が、彼の継承者とあなたとを結びつけていました。世間では、王位継承者以外の誰がルクレティアを娶るのにふさわしいだろうかと噂していました。(……)頑固なルクレ

ティウスが結婚を破談にしたのです……。』⁸⁾ 侍女の発言から、民衆はふたりの婚約を祝福し、ルクレティアの結婚相手は現夫であるコラティニウスよりもセクストゥスの方が相応しいと考えていたことがうかがえる。侍女はルクレティアの前でコラティニウスについての不満をもらしてしまう。するとルクレティウスは侍女をいなし「今こうしてコラティニウスがわたくしの夫であるのだから、彼が夫として一番ふさわしかったのですよ」⁹⁾ と答えている。

さらに踏み込んでルソーは、ルクレティアが今でもセクストゥスを愛しているということにしている。リウィウスによればセクストゥスがルクレティアの屋敷を訪ねた時、父親も夫も不在であったが、ルソーの作品では父親とブルトゥスは屋敷近くにおりセクストゥスの従者と遭遇している。そしてこの時、ブルトゥスは「ルクレティアはセクストゥスを愛している」とルクレティアの父親に告げる。驚く父親に向かって、ブルトゥスは話し続ける。「そう、タルクィニウスの息子はあなたの娘に愛されているのです。しかし、この秘められた感情に気づいているのは私だけで、その感情の対象であるあの暴君も、この感情を抱いている彼女もこの気持ちに気づいていないのですよ。この致命的な秘密が発覚すれば、この貞淑で尊敬すべき女性の命にかかわるということはおわかりでしょう。無意識 (involontaire) の愛情は抑え込まれ、彼女の偉大な魂の中で、気づかぬうちにどれほど驚異的な強靱な精神力と美德を生み出しているかおわかりですか？」¹⁰⁾ そしてブルトゥスは次のように進言する。「あなたの娘は我々の信頼に値します。思い切って我々の計画を彼女に打ち明けましょう。そうすればタルクィニウスはお終いです。」

ブルトゥスの発言から、彼らが密かに王家打倒を計画していることが考えられる。そしてブルトゥスはその計画にルクレティアを利用しようとしている。父親とブルトゥスの野望のために（夫コラティニウスはこの企みを知らされていない）、彼女はかつてはセクストゥスとの恋を犠牲にし、今度はその身体までもが犠牲にされようとしている。草稿の断章のな

かに、ルクレティアが侍女に向かって言う台詞がある。「同情心からかれて、ルクレティアが美德を忘れてしまうとしても、悪人が死んで、お父さまが人の上に立ち、祖国が自由になるほうがいいではないかともいうの？」¹¹⁾ 父のために徳を捨てるか、貞節を守るか葛藤するこの言葉は、彼女が父親とブルトゥスの計画を知った時の台詞として書かれたのではないだろうか。

『ルクレティアの死』は未完で父娘のやりとりはわからない。しかし、『新エロイーズ』(1761)では、娘の葛藤が細かく描かれている。

『新エロイーズ』

『新エロイーズ』は1761年1月にパリで出版されると、たちまちベストセラーとなった。この作品は書簡体の恋愛小説で、6部で構成されている。レマン湖畔近くのヴヴェーという小さな村の貴族の娘ジュリとその家庭教師サン＝プルーの恋から物語は始まる。ふたりは密かに愛を育み一度は結ばれるのだが、それを知ったジュリの父親は激怒しふたりが会うことを禁じる。ジュリは流産してしまいサン＝プルーはパリへ旅立つ。文通は隠れて続けられるが、ある時ジュリの母親に見つかってしまう。その直後ジュリの母親は重い病で死んでしまいジュリは罪悪感に苛まれる。天然痘にかかってしまったジュリは回復すると父の命令に従ってヴォルマールと結婚する。サン＝プルーは絶望して世界周航の旅に出る。数年後、旅から戻ったサン＝プルーはヴォルマール夫妻が治めるクラランの共同体で生活を始め夫妻の子供たちの家庭教師となる。ある日、ジュリは家族とシオンへ出かける。次男が湖へ落ち、ジュリは息子を助けようと自分も飛び込むのだが、それがもとで床につき死んでしまう。死の直前、ジュリはヴォルマールにサン＝プルーにあてた手紙を託す。その手紙にはジュリが生涯胸の奥に抱き続けていた彼への愛が綴られていた。

ここで取りあげるのは、ジュリが父親にヴォルマールと結婚するよう説

得される場面である。ジュリの父親は、20年来の友人で命の恩人でもあるロシアの貴族ヴォルマールに娘を嫁がせる約束をしていた。サン＝ブルーを愛しているジュリは抵抗するが、父親は貴族ではない男との結婚を認めない。彼女が「お父さまはわたくしの命をご自由になさる権利はおありでも、わたくしの心を自由にはなされません、どんなことがありましようともわたくしは意志を変えません」¹²⁾ と言うと父親は激高する。しかし、父親は突然泣き崩れ、彼女の膝にしがみつくと、涙でぬれた眼で見つめ「娘よ、お前の不幸な父の白髪を尊敬しておくれ、おまえをおなかに持っていた人と同じように父をも苦しみつ墓場にはいらせるようなことはしないでおくれ。ああ、お前はすべての家族を死なせるつもりかね」¹³⁾ と訴える。その姿に衝撃を受けたジュリは「半ば死んだように *demi-morte*」¹⁴⁾ 父親の腕のなかに身を投げ出し、「お父さまのご脅迫に対しては刃向かう武器がございましょうけれども、お涙に対しては刃向かうすべがございません。お父さまこそ娘を死なせておしまいになるのですわ」¹⁵⁾ と答え、父親の言いつけに従う。父親がジュリを諭して「羞恥心にせめられる偏愛や若い頃の一時の情火が、娘の義務と、父の名誉が傷つくことに果たして比較できるものかどうか考えてごらん」¹⁶⁾ というように、父親の名誉のためにジュリが自分の恋を犠牲にしたことがわかる。一方、この結婚は、祖国で全てを失ったヴォルマールにとっては人生の再開であり、ジュリを女主人として迎えてクラランの共同体というユートピアが誕生する。

ヴォルマールと結婚したジュリはクラランに住み、家族や使用人たちとともに平穏な生活を送る。使用人と夜なべ仕事をする彼女の姿は侍女たちと糸をつむぐルクレティアの姿に重ねられる。彼女もまた平穏な生活を好む。「慎み深い生活のお手本こそ、わたくしにとって唯一役に立つ教訓です、そして最も尊敬に値する女性とは、賞賛される時でさえも世人の口へのぼることが最も少ない女性だと、わたくしは常々考えていました」というルクレティアの言葉を引用して、ジャン・ルセルクルは「ルクレティアはジュリの姉である」と指摘している。¹⁷⁾ ルクレティアもまた静かな生活

を好む。彼女はかつてセクストゥスの婚約者で、いまでも無意識に彼のことを愛している。しかしコラティニウスの穏やかで教訓的な愛のほうがセクストゥスの激情より彼女を幸福にできるだろう。それはジュリがヴォルマールとの生活で平穏な幸せを感じるようなものである。ところが、ヴォルマールはクラランにサン＝ブルーを呼び寄せ、子どもたちの家庭教師を依頼する。ジュリはかつての恋人と夫との共同生活を送ることになる。友人としてサン＝ブルーに接し貞淑な妻であり続けたジュリであったが、彼女の死後にサン＝ブルーが受け取った手紙で次のように告白している。「わたくしに生きる力を与えてくれたあの最初の感情はどんなに抑えつけようと思っても駄目で、その感情はわたくしの心に凝り固まってしまったのです。(……) 否応なく残ってしまったこの感情は意志の埒外 (involontaire) にあったのでして、少しもわたくしの潔白の思いにはなりません。わたくしの意志に属することはすべてわたくしの義務の領分でしたが、わたくしの意志に属さない心はあなたのご領分であったとしましても、それはわたくしにとっては責苦ではございましたけれど罪ではございませんでした。わたくしはなすべきことをいたしました。徳は汚れなくわたくしに残っておりますし、愛は良心の呵責なく残っております。」¹⁸⁾ ルクレティア同様、ジュリもまた意志とは無関係 (involontaire) に現れる感情を抑えながら夫への貞節を守り続けたのである。

『エフライムのレヴィ人』

小散文詩『エフライムのレヴィ人』(1762) は旧約聖書の『士師記』19～21章を下敷きとした作品で、ルソーはこれにアクサという娘のエピソードを創作して加えた。『ルクレティアの死』、『新エロイーズ』と異なり、この作品では女性の犠牲が反復されている。

エフライムに住むレヴィ人がベツレヘムでユダ族の娘を見初めて連れ帰る。ふたりは一緒に暮らし始めるが、しばらくすると娘は親もとへ帰って

しまう。レヴィ人は娘を迎えに行く。娘の父親はレヴィ人を歓待し、彼と娘との結婚を承諾する。エフライムへ帰る途中、日が暮れたので、レヴィ人と妻はベニヤミン族の住むガバに寄る。一行が広場で寝る準備をしていると、ひとりの老人が現れ彼らに宿を提供する。夜になると町の若者たちが老人の家に押しかけ、レヴィ人を渡せと要求する。老人が身代わりに自分の娘を差し出そうとすると、レヴィ人は妻の腕をつかみ家の外に出す。瞬時に妻は取り囲まれ、一晩中乱暴され死んでしまう。レヴィ人は妻の遺体を持ち帰り、それを12に切り分けてイスラエルの各部族へ送る。これを受け取ると、イスラエルの全部族が集まりレヴィ人を尋問する。レヴィ人は事件について語り、後事を託すと息絶えてしまう。居合わせた者全員が復讐を誓い戦いが始まる。

作品前半で犠牲になるのはレヴィ人の妻である。夫の身代わりにならず者たちの手に引き渡された時、すでに彼女は恐怖で「半死 *demi-morte*」¹⁹⁾の状態になっていた。『新エロイーズ』で用いられた表現がここでも使われている。レヴィ人の妻の遺体は切断され送られるが、それによって散らばっていた人々が集まり、復讐のための連合軍が結成される。

作品後半、イスラエル連合軍対ベニヤミン軍の戦いは三日続く。ベニヤミン軍は敗れ600人の男だけが生き残った。人々は話し合い、戦いに参加しなかったヤベシギデアレの住民の処女400人をベニヤミン族に与え、それ以外は皆殺しにした。それでもまだ200人の娘が足りない。長老たちの話し合いで、ある老人が提案した。シロの祭にやって来る娘たちから、各々気に入った娘を連れ帰ればよいというその勧めに従って、ベニヤミンの男たちは娘たちを攫って帰った。『土師記』で語られているのはここまでである。ルソーはこれに自分で創作したエピソードを加えた。

ベニヤミンの男たちはシロの娘たちを取り囲む。逃げようとする彼女たちの中にアクサという娘がいた。彼女にはすでにエルマサンという許婚がいたのだ。そこへ、彼女の父親が現れる。彼女の父親こそ話し合いで提案した老人であった。父親はアクサに言う。「アクサよ、お前はわしの心を知

っているはずだ。わしはエルマサンが好きだ。彼はわしの晩年の慰めになったかもしれない。だがお前の民の救済とお前の父の名誉のほうが、彼に優先せねばならぬ。娘よ、お前の義務を果たしてくれ。」²⁰⁾ 父親はアクサを説得するために、父親の名誉と娘の義務を持ち出している。父親に見つめられアクサは決心する。そして彼女もまた「半死 (demi-morte) の状態で」²¹⁾ ベニヤミンの男の腕の中に崩れ落ちるのである。それを見た他の娘たちもアクサに倣い男たちに身をゆだねる。この光景に人々は心を打たれ、歓声上がる。イスラエル民族に平和が戻り作品が完結する。

ルソーが加えたアクサの物語は、前半のレヴィ人の妻やジュリの物語の反復になっている。レヴィ人の妻は一度出ていくが、父親によってレヴィ人のもとに帰される。婚約者のいたアクサはベニヤミンの男から逃げようとするが、父親の命によりその男のもとへ行く。ジュリも恋人を諦め、父親の決めた相手に嫁ぐ。彼女たちは騒動にまきこまれ「半死」の状態になるが、その後状況が大きく変わる。彼女たちの犠牲が引き金となって何らかの新しい共同体が形成されている。そして、父の名誉のために犠牲になる娘や夫への貞節と美德を守るため密かに葛藤する妻の姿は、『レクレティアの死』のヒロインにも見出すことができる。ルソーは繰り返し女性の犠牲を描いているが、彼女たちはある瞬間から個人から象徴的な存在へと変化する。ルソーは、共同体が誕生あるいは再生する瞬間を女性の物語を通して描こうとしたのではないだろうか。

もうひとつの犠牲の物語

ルソーが女性の犠牲について描こうとしていたと考えられる作品がもうひとつある。それは『エミールとソフィー、孤独な人々』である。『エミール』(1762)の続編であるこの作品は、あまり知られていない。『エミール』は、エミールとソフィーが結婚し、まもなく子どもが生まれるというところで終わっている。続編は、エミールがかつての師に宛てた2通の書簡で

構成され、その後の二人の生活が書かれている。夫婦はパリで生活を始めるが、ある日、ソフィーはエミールに彼以外の子供を身ごもっていることを告白する。エミールは家を出、やがて何もかも捨てて旅に出る決心をする。すると彼が乗った船は海賊に襲われ乗客は奴隷として強制労働場に送られてしまう。労働は過酷を極め、エミールはほかの奴隷たちとともにストライキを起し労働条件の改善を訴える。エミールの活躍は提督の目に留まり彼は現場監督に任命される。作品はここで途切れている。しかしルソーは結末まで考えていたことが確認されている。²²⁾ エミールは解放され孤島にたどり着き、そこに住むスペイン人の父娘と出会う。エミールはその娘と結婚するが、そこへソフィーが現れて共同生活が始まる。ソフィーは水の事故が原因で死んでしまうが、直前にエミールに手紙を渡す。そこには不貞の真実が書かれていた。ソフィーが妊娠したのは彼女に嫉妬した女友達に謀られたためで、彼女の貞節心までは汚されていなかったことが明らかになる。ルソーはベルナルダン・ド・サンピエールに、「この作品のテーマは役に立ちます。徳をみがくだけでは十分ではなく、悪徳から身を守ることも大切なのです。女性は男性に対してよりも、女性に対してずっと用心しなければなりません」と語っている。²³⁾ ところで『ルクレティアの死』には、ルクレティアの侍女とセクストゥスの従者が知り合いで、ふたりが侍女の部屋からセクストゥスを屋敷に入れるよう密談する場面がある。ルクレティアの侍女とソフィの女友達、これもまた意図した反復なのだろうか。この点についてはまた別の機会に論じることにしたい。

- 1) Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres Complètes I*, (以下O.C.と略) Gallimard, 1959, p.8, 『告白』上, 桑原武夫訳, 岩波文庫, 1986年, p.16
- 2) O.C.I. p.9, 『告白』上, 桑原武夫訳, 岩波文庫, 1986年, pp.16-17
- 3) O.C.I. p.394, 『告白』中, 桑原武夫訳, 岩波文庫, 1985年, pp.179-180
- 4) O.C.III. p.119, 『人間不平等起源論』, 本田喜代治・平岡昇訳 p.22
- 5) O.C.II, p.1869
- 6) O.C.I. p.394, 『告白』中, 桑原武夫訳, 岩波文庫, 1985年, p.183
- 7) リウィウス『ローマ建国以来の歴史』1, 岩谷智訳, 京都大学学術出版会, 2008年, pp.119-125
- 8) O.C.II, p.1025
- 9) *Ibid.*, p.1025
- 10) *Ibid.*, p.1032
- 11) *Ibid.*, p.1045
- 12) *Ibid.* p.348 『新エロイーズ』2巻, 安土正夫訳, 岩波文庫, 1986年, p.274
- 13) *Ibid.* p.348, 同, p.274
- 14) *Ibid.*, p.348, 同p.274
- 15) *Ibid.*, p.348, 同p.274
- 16) *Ibid.*, p.348, 同p.275
- 17) Jean Lecercle, *Rousseau et l'art du roman*, Almand colin, Paris, 1969, p.48
- 18) O.C.II. p.743, 『新エロイーズ』4巻, 安土正夫訳, 岩波文庫, 1986年, pp.270-271
- 19) *Ibid.*, p.1214, 『ルソー全集』11巻, 松田清訳, 白水社, 1980年, p.146
- 20) *Ibid.*, p.1223, 同, 1980年, p.155
- 21) *Ibid.*, p.1223, 同, p.155
- 22) Ch. Wirtz, *Note sur Emile et Sophie*, A.J.J.R. XXXVI, 1966
- 23) Bernardin de Saint-Pierre, *La vie et les œuvres de Jean-Jacques Rousseau* Edition présentée et annotée par Raymon Trousson, Honoré champion, Paris, 2009, p.186

Women's sacrifice in the works of Jean-Jacques Rousseau

Haruna MAENOSONO

《Abstract》

Rousseau's writings contain a variety of examples of women's sacrifice, such as Lucrece, Julie, Léville's wife, Axa and Sophie. Their sacrifices bring about a change in the circumstances of the community to which they belong. With these sacrifices as turning points, a community is formed or changed. From this perspective, women can be considered pivotal, so it is curious that Rousseau makes no mention of women's role in the community in *The Social Contract*. Women also play a role in the community. Analyzing Rousseau's texts concerning women and women's sacrifice, I would like to elucidate the correlation between the formation of a community and women's sacrifice in Rousseau's ideas.